

Title	千葉県八日市場市宿井下貝塚の調査
Sub Title	A report on the excavation of the shell mound at Shukuishita (宿井下), Yokaichiba, Chiba Prefecture
Author	清水, 潤三(Shimizu, Junzo) 近森, 正(Chikamori, Masashi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1959
Jtitle	史学 Vol.32, No.2 (1959. 7) ,p.80(208)- 98(226)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19590700-0080

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

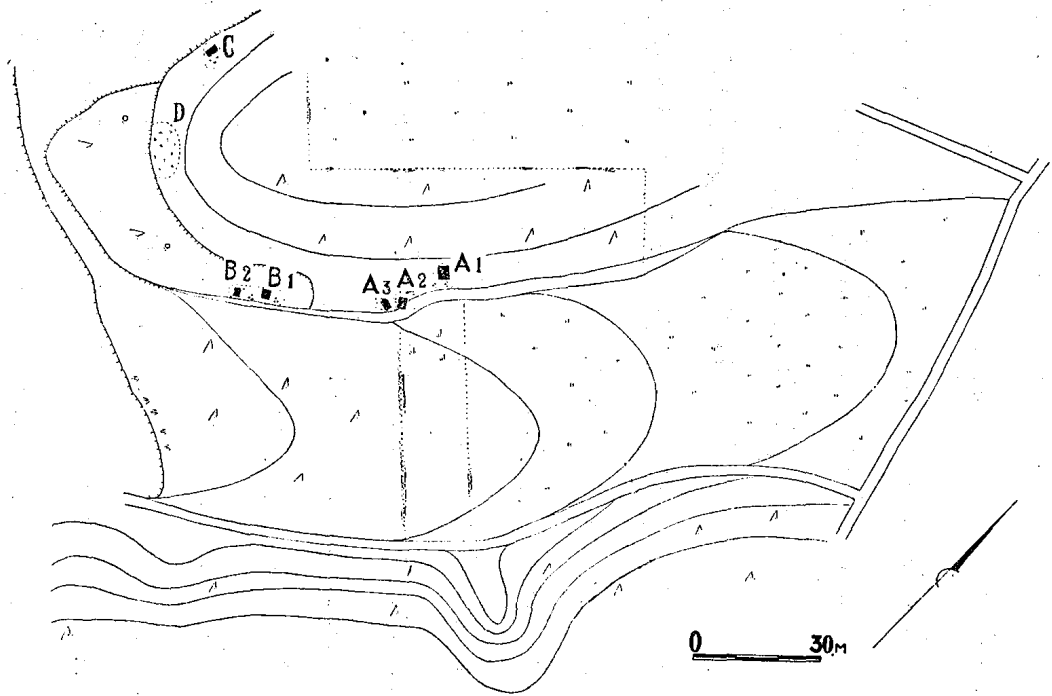
千葉縣八日市場市宿井下貝塚の調査

清 水 潤 三
近 森 正

本調査は栗山川溪谷における貝塚の地域的研究の一環として、去る昭和三十二年に實施した。略報作製に當り本文圖版とも近森が擔當執筆し、清水が補訂を加えたが、文責は兩名の共同して負うものであることを明記しておく。

一、遺跡及び附近の地形

宿井下貝塚は、千葉縣八日市場市吉田地區（舊、匝瑳郡吉田村宿井下）にあり、八日市場市より多古町、成田市へ通ずる縣道に沿つて北西方約五軒にして達する。（清水潤三「千葉縣栗山川溪谷における貝塚の地域的研究（予報）」、「史學」第三十一卷第一―四號）所載、栗山川溪谷主要貝塚分布圖參照。 標高二十米内外を以つて北西方より東南方に延びる吉田丘陵は、侵蝕を受けて、複雑な樹枝狀支谷を各所に形成し、支丘を發達させているが、本貝塚の存在する臺地は、この吉田丘陵の北西方に張り出した支丘の一つである。この臺地の北側は、東西に走る借當川溪谷によつて斷ち切られ、沖積地を距だて、飯高丘陵と相對する。西側は、舌狀臺地をなして丘陵先端部に至り、栗山川溪谷が借當川、多古橋川を分岐する廣々とした沖積地に臨んでいる。又、南側には、遺跡の存する丘陵の裾を廻ぐつて灣入、屈曲しながら栗山川溪谷の一支谷に開口する浸蝕谷を控えている。貝塚は、栗山川沖積地の



第 1 圖 宿 井 下 貝 塚 實 測 圖

強い支配を受けた右の浸蝕谷に南面する丘陵縁邊に沿つて點在するが、臺上に於ける貝殻の散布は殆どみる事が出來ず、谷に南面する丘陵斜面の數個所に貝層が露呈しているにすぎない。(第1圖)

二、発 掘

宿井下貝塚の發掘調査は昭和三十二年三月二十二日から二十四日まで行われた。まずA B兩地點に小貝塚が存在することが確認されたので、小支谷に南面する丘陵の縁邊に沿い、谷奥側よりA地點に第一區、第二區、第三區、B地點に第一區、第二區の各小トレンチを設定して作業を開始したが、各トレンチについて調査狀況の説明を記すと次の如くである。

A地點第一區……一・五×一・五米を以て開設。地表面には殆んど遺物及び貝殻片の散布を認めない。表土は北するに従つて厚さを増し、南側即ち谷に面する側に薄い。中央部斷面に於ける北壁と南壁の表土の厚さは五〇〜二五糎であり二五糎の差を持つが、これはそのまゝ地表の傾斜を示している。表土剝除中に土師器片二片を採集した。表土の下は黒色有機質土壤を極めて多量に含む混土貝層に漸

移するが北壁及び西壁の周邊部に於ては貝層は消失し、表土層より直ちに褐色粘土質土層に遷移する。この褐色粘土質土層からは、何らの遺物を出土することがなく約二〇〜三〇糎の厚さを示めし、次第に不明瞭な變化を以て黄褐色ローム層 (Soft Loam) に遷移している。粘土貝層の部分は平均四〇糎の厚さを持ち、半レンズ状をなして褐色土層に介在するが、貝の含量は上部粘土貝層に於て比較的粗であり、下部粘土貝層に至つて密である。貝の種類はカキを主體とし、ハイガイ、ハマグリがこれに次ぐ。土器片は上部粘土貝層より多く採集された。(第2圖上参照)

A 地點第二區……一・五×一・五米。地表面は谷側に向つて一〇度内外の傾斜を有する。表土層の厚さは平均四〇糎地表面とほぼ等しい傾斜を示めす。以下はA 地點第一區にみられた褐色土層を認めず、直ちに粘土貝層になる。粘土貝層は第一區の限界的状態に對し、貝殻を多量に含む。深度約八〇糎にしてローム層に至る。貝類及び土器の包含状態は第一區と等しい様相を示めていた。(第2圖中参照)

A 地點第三區……一・五×一・五米。地表より表土層四〇〜五〇糎の下に粘土貝層が現われる。この粘土貝層の厚さは北壁にて約三〇糎。南壁 (谷側) で四〇〜五〇糎。南へ向けて厚さを増し、かつ二三度内外の傾斜をもっている。貝殻含量は上部粘土貝層に粗、下部粘土貝層に密度を増す。又同時に北壁西側部で極端に薄くなり消滅しているのを見届けることが出来た。(第2圖下参照)

調査後試掘的に北壁を更に丘陵上に向けて擴張した結果によれば、この粘土貝層は北壁から更に北方へ四五糎の地點で、半レンズ状に介入した状態で盡きている。

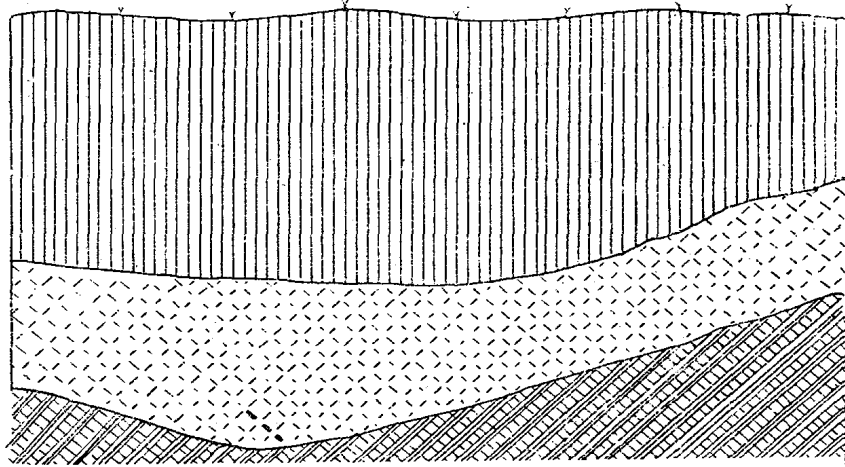
以上、A 地點第一區、第二區、第三區各トレンチ粘土貝層の堆積状態の觀察から、貝殻の遺棄が第二區の北側周邊を中心に丘陵上崖際から谷側に向つて行なわれ、それが南に向けて堆積しつゝ横位に廣がつたものと見るべきで、その

ため貝塚の東端と西端に當る第一區と第三區において限界的状態を示めしているものと考えられる。従つてA地點貝塚は丘陵縁邊に沿うて谷に南面する斜面貝塚の性格を有するものであると解するのが妥當であろう。

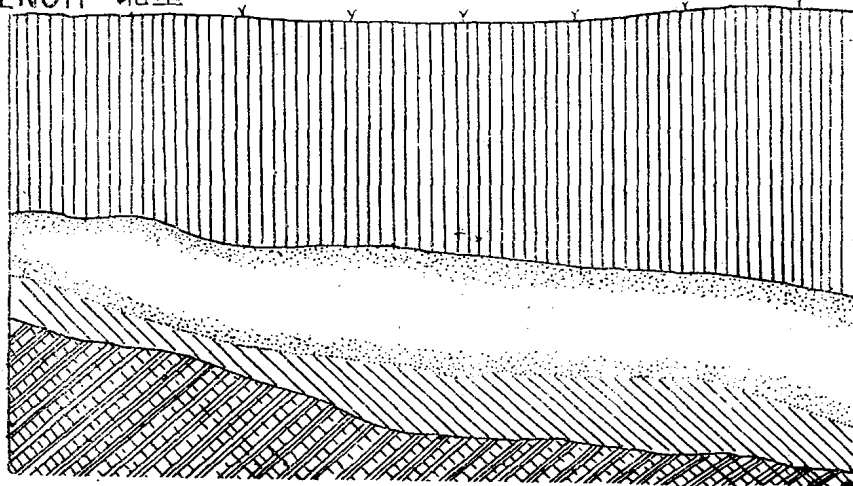
B地點第一區……一・〇×一・五米のトレンチを設定。地主の言によれば、この地點は植林を行うために谷側に向う自然斜面をならして丘陵縁邊部にいくらかの盛土をしたといふことで、表土層中にはこの盛土の際混入したとみられるローム質褐色土の散在するのが認められた。表土層は平均四〇糎程度の層厚を示めしながら谷側に約一五度、西側に約二〇度夫々傾斜を持つ。文化遺物は殆どみられず表土下層部より土師器小片二片を採取したのみである。深度四〇〜五〇糎で混土貝層に至るが、上部混土貝層は黒色土を多量に混じえた混貝黒色土層とも云うべき状態。下部混土貝層は厚さ約三〇糎上部混土貝層に比し貝殻を幾分密に包含する。一般的にカキ、ハマグリ、ハイガイ、オキシ、ツメタガイ、シオフキ、ウミニナ等を認めたがカキ及びハマグリが最も多量である。貝類相はA地點とほぼ同様な様相を示めしているるとみてよい。文化遺物は全てこの下部混土貝層より發見された。この層の下は直ちにローム層となる。たゞし北壁に面して東側半分は表土より次第に黄色砂質のローム質土層に變化しているが、この部分には混土貝層が介在せず、遺物も全く包含されていないから恐らくは攪亂層であろう。その厚さは最も厚い部分で四〇糎を測る。その下は赤褐色を呈するローム層に入るが、その下限及び基盤を確認するに至らなかつた。(第3圖上参照)

B地點第二區……一・〇×一・二五米。表土は深度六〇糎を越え、南側には多量のローム塊が散在している。文化遺物は表土最下層部よりその下の混土貝層に亘つて採集された。混土貝層は、平均厚さ七〇糎を有し、黒色土を混じえ、下層に向うに従つて、カキを主體とする貝殻が密になる傾向にある。兩者の層位は漸次的移行を示し明瞭な一線を以つて劃する事が出来ない。貝類層はB地點第一區トレンチと同様である。以下深さ一六〇糎で不明瞭に褐色ローム層(Soft

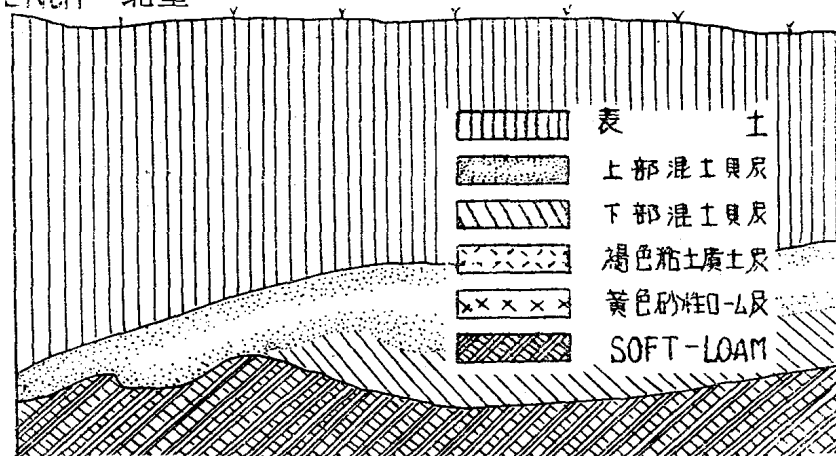
A.1 TRENCH - 北壁



A.2 TRENCH - 北壁



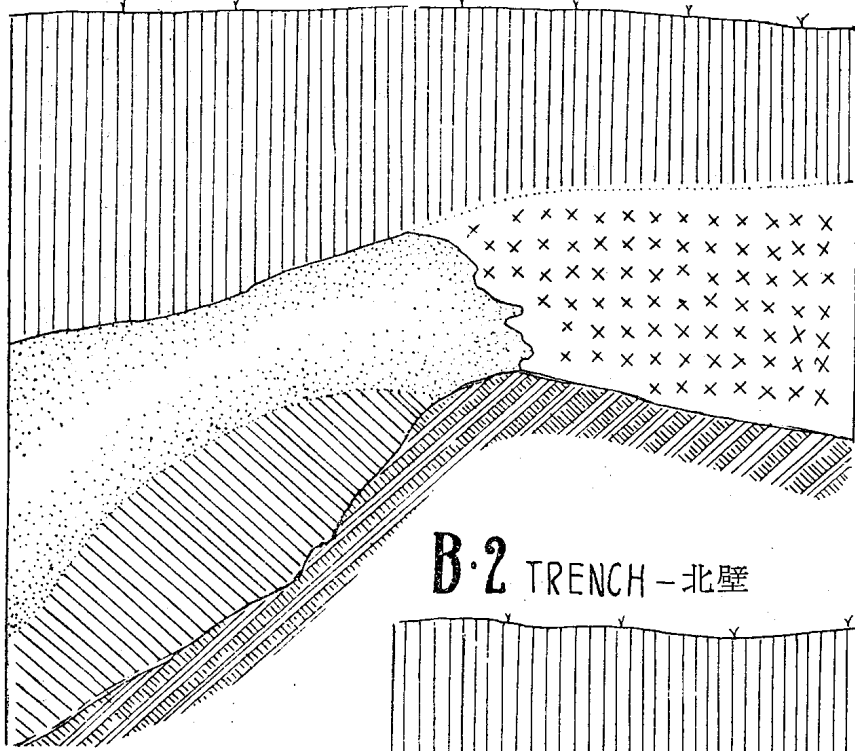
A.3 TRENCH - 北壁



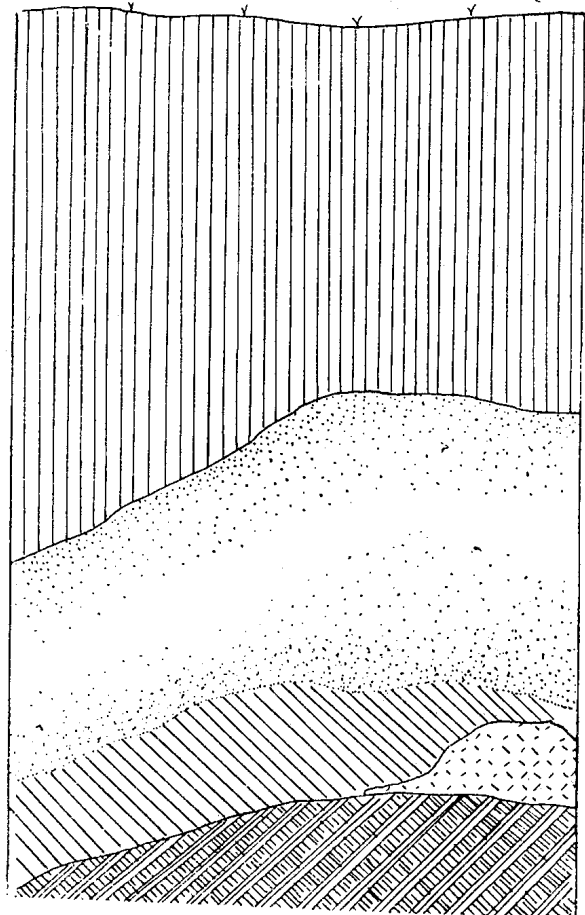
0 100cm

第 2 圖 宿井下貝塚A地點各トレンチ断面圖

B-1 TRENCH - 北壁



B-2 TRENCH - 北壁



	表土
	上部混工貝戻
	下部混工貝戻
	褐色粘土質土戻
	黄色砂性土戻
	SOFT-LOAM



第 3 圖 宿井下貝塚 B 地點各トレンチ断面圖

Loam) に遷移する。(第3圖下参照)

C 地點試掘壕……調査の進展に伴い、本遺跡が支丘縁邊に沿つて點在する貝塚群の性格を持つものであると認められたので、更に附近にも貝塚が點在することを予想し、その發見に努めた。その結果ボーリング探査により、本支丘先端部に二個所の小貝塚を確認した。それらを夫々C地點、D地點と定め、(第1圖)前者の一部に試掘を行つた。C地點は非常に柔い赤褐色の腐植土によつて覆われ、深度約三〇糎にして比較的堅質な褐色土層をレンズ狀に挟んで混土貝層に移る。文化遺物は全てこの層より出土した。貝はカキを主體としてハイガイ、ハマグリ、アサリ、オキシギミ等を含む。混土貝層は二〇糎前後の薄層で、下部はローム層に移行する。土器はA・B兩地點と全く同様の織維土器を數片採集したのみであつたが、本地點も略々A・B兩地點と同一文化期に營まれた貝塚であることが知られた。

三、自然遺物

I. 軟體動物 Mollusca

	腹足類	Class Gastropoda	出土トロンチ	覆占度 (階級)
1	ア カ ニ シ	<i>Papana thomasiana</i> Crosse	A 1,2,3; B 1,2.	3
2	シ ヲ イ シ	<i>Thais (Mancinella) bromi</i> (Dunker)	A 1,2,3; B 2.	2
3	カ ヲ ア イ	<i>Cerithidea (Cerithideopsis) cingulata</i> (Gmelin)	A 1,2,3; B 1,2.	1
4	ハ ナ タ リ	<i>Cerithidea (Cerithideopsis) microptera</i> (Kiener)	A 2,3; B 1,2.	1
5	イボウミニナ	<i>Batillaria zonalis</i> (Bruguère)	A 1,2,3; B 1,2.	1

6	カニモリガイ	<i>Cerithium kochi</i> Philippi	A 1,2,3; B 2.	2
7	ツメタガイ	<i>Natica (Neverita) didyma</i> ("Bolton" Röding)	A 1,2,3; B 1.	1
8	バ	<i>Babylonia japonica</i> (Reeve)	A 2,3; B 1.	2
		双殻類 Class Bivalvia		
1	ハ	<i>Anadara granosa</i> (Linné)	A1,2,3; B 1,2.	5
2	マ	<i>Ostrea (Crassostrea) lapelouii</i> Schrenck	A 1,2,3; B 1,2.	5
3	イ	<i>Ostrea (Crassicostraea) nippona</i> Seki	A 2,3; B 2.	1
4	ア	<i>Venerupis (Amygdala) philippinarum</i> (Adams)	A 1,2,3; B 1,2.	4
5	シ	<i>Mactra veneriformis</i> Reeve	A 1,2,3; B 1,2.	3
6	ハ	<i>Meretrix meretrixlusoria</i> (Gmelin)	A 1,2,3; B 1,2.	3
7	チ	<i>Meretrix petechialis lamarckii</i> (Deshayes)	B 1.	2
8	オ	<i>Cyclina sinensis</i> (Gmelin)	B 1,2.	3
9	カ	<i>Dosinia (bhaicosoma) japonica</i> (Reeve)	A 1,2,3; B 1,2.	3

優占度階級

1=	少しかない。
2=	少しある。
3=	あまり多くない。
4=	多くある。
5=	非常に多くある。

I. 脊椎動物 Vertebrata

	魚類	Class Pisces
1	ク	<i>Sparus longispinis</i> (Temminck et Schlegel)

千葉県八日市場市宿井下貝塚の調査

- 2 イ ヲ ヲ ロ *Pagrosomus unicolor* (Quoy et Gai)
 哺乳類 Class Mammalia
- 1 イ ノ シ シ *Sus leucomystax leucomystax* (Temminck et Schlegel)
- 2 リ ヲ ノ シ カ *Cervus nippon nippon* Temminck

本貝塚調査トレンチより採集された貝類は、鹹水産種十七種である。双殻類では、ハイガイ、マガキが優占種を示めし、次いで、アサリ、シオフキ、ハマグリが比較的顯著である。ハイガイは、高さ三一耗前後が標準の大きさであつて、各トレンチに於て最も多きを占める。しかし、その包含密度はA、B兩地點トレンチに稍々、相異が觀られ、B地點に於けるハイガイの包含量はA地點に於けるほど、密ではないように觀察され、殊に下部混土貝層に於て明らかであつた。又、オキシドミはB地點第一區トレンチに特に顯著であつて、A地點からは、全く檢出されなかつた。腹足類では、アカニシ、レイシが目立った。總じて、貝の種類は、局部的に一様ではないが、總體的にみて、混土貝層、純貝層とも、ほど等しい比率を示めすものとしてよい。

以上、貝類相の示めす栗山川溪谷及び、その支谷沖積低地の自然環境は、繩文々化前期に於て礫と泥を相當混入する内灣泥海性の灣、乃至は潟型式の海岸地形を形成していたものと推され、ハイガイ、カキの棲息に適した生態環境が存在したと考えられる。

脊椎動物の遺骨は僅めて少量であつて、哺乳類では、イノシシ、ニホンジカの存在が目立つ程度である。魚類は、クロダイの如き内海性のものが顯著である。この點は貝類相の示すところとよく合致する。

四、土 器 類

宿井下貝塚A、B、C三地點の發掘によつて出土した土器はきわめて少量で、破片總數は一九五片にすぎず、各トレンチを通じ完形品は全く無く全器形を推知し得るような大破片も皆無である。各トレンチの層位別出土數量は第一表の如くである。表土層より發見された土師器類を除けば、これらは總て縄文文化前期に屬するもので大部分は關山式及び黒濱式に比定され、本貝塚の編年的位置を決定している。分類は、文様構成要素を摘出する事によつて大別し、更に文様の構成、製作手法の差異を規準として細別を行なつた。以下、分類の結果を記載すると次の如くである。

第一表

宿井下貝塚各トレンチ出土土器片層位別數量

trench		土 層	
		表 土	混 土 層
A ₁	U	3	4
	T	—	20
	B	—	1
A ₂	U	—	1
	T	8	6
	B	—	—
A ₃	U	—	—
	T	—	13
	B	—	1
B ₁	U	—	2
	T	1	21
	B	—	—
B ₂	U	1	1
	T	—	9
	B	—	—
C	U	—	2
	T	—	8
	B	—	1

{ U.....口 邊 部
 { T.....胴 部
 { B.....底 部

第一類土器

本類は半截竹管文の名をもつて呼ばれる文様を附した土器を總括する。それらは、更に、(a)半截竹管による平行直線文土器、(b)連續爪形文土器の二群に細分される。

(a)群 半截竹管による平行直線文土器(第4圖1~6) 本群に入れた土器は禾本科植物の莖を縦に二つに割截し、その半截部を下にして横走又は斜走する二本の平行沈線文を描出したものである。1~4は無文部に直接、平行沈線が描出されるが、5は刺突文を地文とし、又6は繩文を地文として、その上に横位の平行直線文を數段施文している。これらは全て胎土中に植物纖維を混入し、焼成は概して不良、吸水性に富む。本群土器は各トレンチに亘つて各層より檢出され、量的には第四類土器に次いで多い。

(b)群 連續爪形文土器(第4圖7・8) 第4圖拓影7は半截竹管狀工具による連續爪形文を密接して平行横位に廻ぐらしたものを數段重ねた文様である。こゝに見られる爪形は麻生優氏の分類によると三截^(註1)及至は四截に従截した竹管を左手に持ち、竹管の外側を上器面に對して右傾させ、かつ銳角方向より施文した結果、管の外側が壓痕として残つたもので、逆D字狀を呈する。この種の文様は黒濱式に現われ、諸磯式において最も盛行するものと考えられているが、こゝでは、B地點第一區下部混土貝層より他の土器と混在狀態で出土した。植物纖維を全く含有せず、焼成良好。器厚八耗。赤褐色を呈し胎土中には小砂粒を含み堅緻である。器形は平縁で口邊が外反する深鉢形と推される。この種の土器は横濱市港北區日吉町矢上谷戸貝塚、同區高田町中居根貝塚、下菅田貝塚⁽²⁾、折本貝塚⁽³⁾、等に見られる諸磯式(矢上期)の土器に類似點を有する。その點、他の出土器がすべて纖維土器であるのと相異している事に注意しておきたい。

第4圖8は、A地點第三區下部混土貝層より出土。口縁部は緩い波狀をなし、口縁下三櫃の位置に口頸部をめぐる隆起

帯を有する。胎土には炭化纖維層を挟み、黒褐色を呈する。爪形文様は縦截した半截竹管状工具を右手に持ち、その弧を下にして器面に對し左傾させ、銳角方向より施文している。この土器は隆起帶及び半截竹管文の發達している點からみると、すでに諸磯式の特徴を示めしているが、纖維を含む點から見れば黒濱式に比定さるべきものと考えられる。

總じて、本類爪形文には、右に記した第4圖8の如き内側竹管文が通常であつてC字状を呈する。D字状、逆C字状は全く檢出されず、逆D字状も稀である。

第二類土器

(第4圖9、11) 竹篋様施文具に依つて爪形文的効果を表わした沈刻文土器を一括する。第4圖9は外反の傾向を持つ波状縁をなすもので、器壁胎土中に極少量の纖維を含有し黄褐色を呈する。黒濱式として標式的なものであろう。

第三類土器

(第4圖12、14) 竹篋状工具による篋描條線文をもつものを第三類とする。文様構成は極めて不規則である。本類に該當する土器片は胴部片が多く、口縁部と認められるものは極く稀であり、文様が胴部以下に施されるのを特徴とする。12は纖維を含むが、13・14は纖維を含まぬ土器である。

第四類土器

繩文のみを施したものを一括する。本類土器は量的に最も多く出土し、各トレンチ各層より普遍的に出土した。更に、(a)單方向斜繩文土器、(b)羽状繩文土器の二群に細分される。

(a)群 單方向斜繩文土器(第4・5圖拓影15、21) 第4圖15は、A地點第一區トレンチの上部混土層より出土。器壁胎土中に禾本科植物の纖維を混入し、土質は極めて粗鬆で吸水性に富み、暗褐色を呈する。器厚10、12珎。文様は右傾

する斜行繩文を以て帶狀繩文を構成する。繩文原體の末端は、各條の繩文帶の上限に於て折れ曲り、條間に入り込んで「**レ**」の字形をなす。即ち渦卷狀或は、蕨手狀の變形繩文の一種である。節は不明瞭であつて觀察不可能であるが、四・五纏の長さを有する左撚りの繩文原體を横位に回轉押捺せるもので、從つて蕨手狀の原體末端は右側へ卷いている。

この種の繩文は、本遺跡出土土器に於て、羽狀繩文を構成する各繩文帶の上限にも認められる。(第5圖22)

この蕨手繩文は、關東では、埼玉縣南埼玉郡綾瀨村蓮田貝塚⁽⁵⁾、同縣入間郡水谷村打越貝塚⁽⁶⁾、神奈川縣三浦郡浦賀町吉井貝塚⁽⁷⁾、千葉縣東葛飾郡小金町幸田貝塚等にみる關山式土器に盛行するものであつて、更に又、奥羽南半における大木1式及び室濱式⁽⁹⁾、上川名上層式に認められるものと、一脈の關連を有するものと考えられる。

第4・5圖16・18・20は單節斜繩文、21は繩文原體を横位に回轉押捺する事によつて、口縁に對し條を水平位に施文したものである。17は、長さ三纏前後の右撚りの纖維束を横位に回轉させることによつて左傾する條壓痕を残すものであつて、帶狀斜繩文を構成する。器厚は十〜十一耗。黑色、多量の纖維を混入し焼成不良、A地點第一區トレンチ下部混貝土層より採集。19は、A地點第二區表土剝離作業中採集せるもので、胎土に纖維を混入することなく、細砂粒を混入する。質は堅く黃褐色を呈する。器厚七耗單節斜繩文を施す。この土器は、第一類(b)群第4圖7に示めた爪形文土器等と共に、纖維を含まぬ土器として注意して置きたい。

(b)群 羽狀繩文土器(第5圖22・24) 本群は、二〜六纏幅の横位の繩文帶が段をなし、且つ、相隣る二段の繩文帶の各條の走行が、互に異なる場合、即ち羽狀繩文を構成するものである。

第5圖23は、A地點第三區トレンチ下部混土貝層より出土し、纖維を多量に含有する平縁の口邊部である。文様は横位に原體を廻轉押捺する羽狀繩文の一種であるが、結節は認められない。口縁下二纏の部位に直徑一・五纏の穿孔を有す

る。第5圖22は、A地點第一區トレンチの下部混土貝層より出土。第4圖15に示めた如く、蕨手繩文を羽狀繩文を構成する繩文帶の上限に施せるもので、繩文原體の末端が各條間に「の」の字狀を描いて入り込んでゐる。繩文は左撚りの繩文原體を横位に廻轉してをり、従つてその末端の壓痕は右に屈曲する。第5圖24は、二本の紐の片方の末端を互に絡げて左撚りと右撚りの連續した繩文原體を作り、それを縦位に廻轉押捺して施文せるもので、繩文帶の條間には挿入された結束の壓痕を残す。纖維を混入し、黑色を呈する。A地點第三區トレンチ上部混土貝層より出土した。

第五類土器

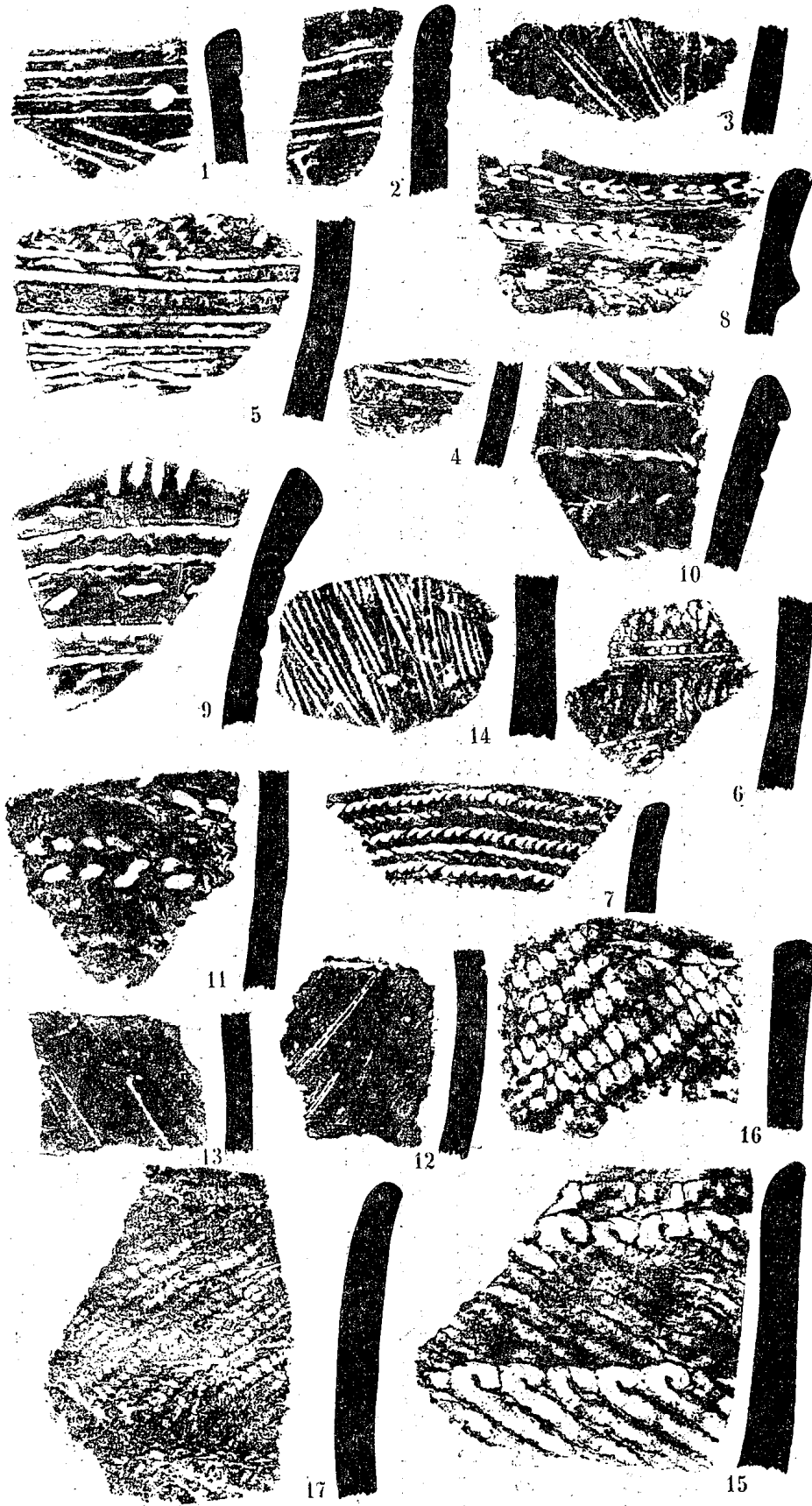
第5圖25と29。撚糸文を器面に施すものをまとめて本類を設ける。第5圖25はA地點第三區トレンチの下部混土貝層より採集したもので、纖維を混入し茶褐色を呈する平縁の口縁部である。文様は撚糸の兩端を兩側へ逆方向に向けて對照的に捲きつけた丸棒狀の回轉體を横位に回轉して生じた木目狀撚糸文を施したもので、結束は認められない。この種の文様は今回の發掘によつては、たゞ一片を得たのみであるが、奥羽地方南部に分布する大木2a式土器に見られる文様と類似している。第5圖27は、右撚りの一度撚りの撚糸を二本並べて丸棒狀の廻轉器具に六、七耗の間隔を置いて巻きつけ、それを縦位方向に回轉押捺し、撚糸複線文を構成するものである。纖維を含有せず胎土に小砂粒を混じ、黒褐色を呈する堅質の胴部破片である。B地點第二區トレンチ上部混土貝層から出土した。29は綾絡文をもつものを示した。土器面に施文する際、結び目のみを回轉させ綾絡文を施した場合の例である。

第六類土器

突刺文を有するものであつて量的には最も少い。第5圖30は、竹篋様工具による突刺文を地文とし、その上に半截竹管を用い、その脚を相互にコンパス様にひきずり半回轉せしめる事によつて生じた入組波狀文を横位に施したものである。

第七類土器

(第5圖31・32) 表土剝離作業中に検出された土師器の小片である。



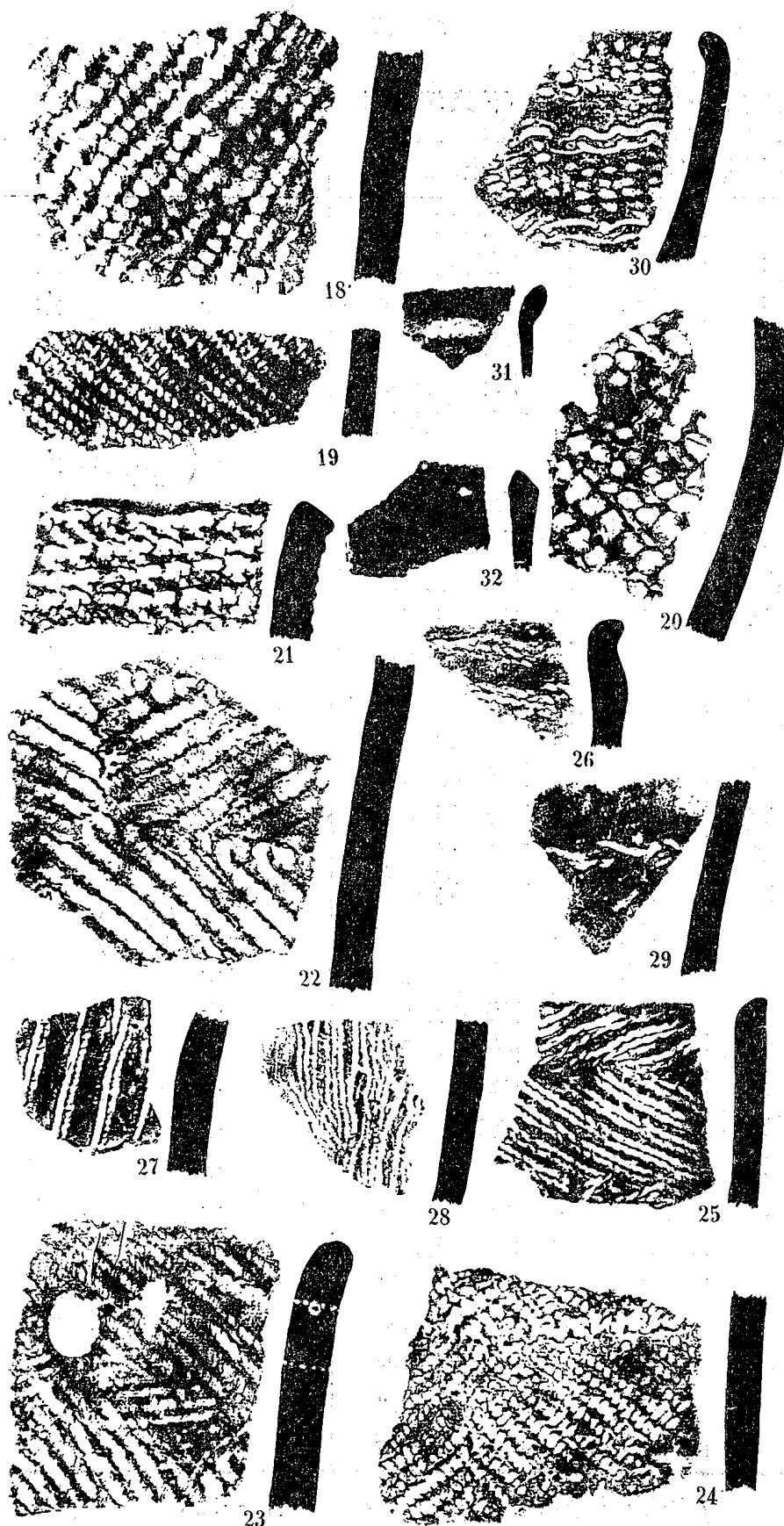
(第 4 圖)

以上、本貝塚出土の土器類を七類に分ち記載した。本遺跡出土縄文式土器に、形式上から編年の位置を與え得るものは、關山式、黒濱式、諸磯式（矢上期）の三型式がある。しかし、斜面貝塚の故もあつて、これら相互の層序關係を明

千葉縣八日市場市宿井下貝塚の調査

(三二三)

九五



(第 5 圖)

第二表

宿井下貝塚出土土器拓影一覽表

史

學 第三十二卷 第二號

拓影番號	Trench	出土層位	纖維混入の有無	色	調
1	B1	上部混土貝層	+	黃	褐色
2	C	上部混土貝層	+	黑	褐色
3	B1	下部混土貝層	+	赤	褐色
4	A2	下部混土貝層	+	赤	褐色
5	A3	下部混土貝層	+	黑	褐色
6	B2	下部混土貝層	+	黑	褐色
7	B1	下部混土貝層	-(小砂粒 質堅密)	赤	褐色
8	A3	下部混土貝層	+	黑	褐色
9	B2	下部混土貝層	+(極少)	黃	褐色
10	C	上部混土貝層	+	黑	褐色
11	A3	下部混土貝層	+	黑	褐色
12	A3	上部混土貝層	+	赤	褐色
13	A2	上部混土貝層	-	赤	褐色
14	A2	上部混土貝層	-(小砂粒 を含む)	茶	褐色
15	A1	上部混土貝層	+	暗	褐色
16	B1	下部混土貝層	+	黑	褐色
17	A1	下部混土貝層	+	黑	褐色
18	A3	下部混土貝層	+	赤	褐色
19	A2	表土層	-(小砂粒 を含む)	黃	褐色
20	A1	上部混土貝層	+	茶	褐色
21	A3	下部混土貝層	+	黑	褐色
22	A1	下部混土貝層	+	黑	褐色
23	A3	下部混土貝層	+	赤	褐色
24	A3	上部混土貝層	+	黑	褐色
25	A3	下部混土貝層	+	茶	褐色
26	A1	上部混土貝層	+	茶	褐色
27	B2	上部混土貝層	-	黑	褐色
28	A1	上部混土貝層	+	赤	褐色
29	A3	下部混土貝層	-	赤	褐色
30	A1	上部混土貝層	+	茶	褐色
31	A1	表土層	-(質堅密)	黃	褐色
32	B2	表土層	-(質堅密)	赤	褐色

(+は胎土中に纖維を含有するものを、-は胎土中に纖維を含有しないことを示めす。)

(三三四)

九六

確にし得るような所見は得られていない。又、關山式と黒濱式、及び纖維土器末期の過渡的な段階を示す土器が、奥羽地方南部に於ける様相といかに關連するかという問題を、更に追究しなければならぬと考える。一般に、關東地方纖維土器の中に東北的色彩の濃厚な點を指摘し得る要素が少ないとは云えない。

結 語

以上、今回の調査に基く結果の概要を記したのであるが、われわれは粗悪な土器片以外に殆んど人工遺物を認めない事實に、注目せねばならない。一般に、關東地方に於て、早期後半より前期にかけて、意外に多くの自然礫や、打痕を有する礫核が出土することは、屢々、我々の経験するところであるが、今回の調査の結果は、石片すら検出されず、その他の人工遺物も極めて乏しかった。この顯著な事實は單に偶然による未検出というよりは、この貝塚の持つ生態的環境に基く現象として解する事が最も妥當であると考へるのである。

なお今回の發掘調査は、昭和二十七年以降、繼續調査して來た千葉縣栗山川溪谷における貝塚の地域的研究の一環として行われたものであり、その研究上に重要な位置を占めるものである。

註

- (1) 麻生優「竹管文に關する試論」上代文化24輯。
- 佐原眞「土器面に於ける横位文様の施文方法」石器時代第3號。
- (2) 大山柏・池上啓介「横濱市菅田貝塚群―關東繩文式文化編年學的研究資料第一冊(史前學雜誌第5卷第6號代冊)」
- (3) 中根君郎「武藏折本貝塚採集の諸磯式土器」人類學雜誌第45卷第6號。
- (4) 佐原眞「土器面に於ける横位文様の施文方法」石器時代第3號。

- (5) 大山柏「東京灣に注ぐ主要溪谷に於ける縄文土器の編年學的調査予報」史前學誌第3卷第6號。
- (6) 酒詰仲男・和島誠一「武藏國打越貝塚に於ける一住居跡に就いて」人類學雜誌第56卷7號。
- (7) 赤星直忠「神奈川縣三浦郡吉井貝塚調査」史前學雜誌第9卷第6號。
- (8) 矢島清作「千葉縣幸田貝塚の堅穴住居遺跡」古代文化第12卷第4號。
- (9) 山内清男「織維土器に就いて」史前學雜誌第2卷第1號。
- (10) 加藤孝「宮城縣上川名貝塚の研究」宮城學院研究論文集I。